

ゴンザの『新スラヴ日本語辞典日本版』（1985）の 訳注の問題点 その3

ゴンザのキリル文字日本語の転写

いぬかい いて
pxi13713@nifty.ne.jp

【要約】

18世紀に漂流者ゴンザがつくった「新スラヴ・日本語辞典」は、1985年に村山七郎が訳注をくわえて日本で出版された。あらたにかきくわえられた部分には、ロシア語の誤訳、ゴンザの訳語の誤解釈、ゴンザの誤訳に気づいていない、などの問題点があるが、それ以前にゴンザの訳語のキリル文字の筆跡をただしくよみとれていない例がいくつかみつかった。ゴンザの執筆意図をできるかぎり正確に解釈することにつとめた。

0. はじめに

「新スラヴ・日本語辞典」は、ロシアの言語学者アンドレイ・ボグダーノフと、ロシアに漂着した日本語のよみかきのできない日本人の少年ゴンザが1738年に完成させた、世界初の露和辞典である。語数約12,000のすべてがキリル文字でかかれており、当時の薩摩方言を記録した貴重な資料である。

1960年代に「新スラヴ・日本語辞典」を発見した村山七郎が1985年に訳注をくわえて出版した日本版は、薩摩方言の研究者にとってつかいやすい資料になった。日本版は、原本のほぼすべての項目をふくんでおり、つぎの改良がくわえられた。

- 1) ロシア語のみだし語を手がきから活字にした。
- 2) みだし語の日本語訳をつけた。
- 3) ゴンザの訳語を手がきのキリル文字からカタカナの活字にした。
- 4) ゴンザの訳語から現代日本語への橋わたしとなる注をつけた。
- 5) ゴンザの訳語だけをアイウエオ順にならびかえたゴンザ語彙リストを巻末につけた。

今回は、このうち3)の「手がきのキリル文字からカタカナ」へのかきかえについて考察する。

1. 『新スラヴ・日本語辞典』の底本

ゴンザが執筆した『新スラヴ・日本語辞典』は出版されなかったが、オリジナルの手がき原稿がサンクトペテルブルクの科学アカデミーに保存されている。その原稿を撮影したマイクロフィルムと、マイクロフィルムからプリントアウトした冊子が鹿児島県立図書館にあって、私たちはそれを閲覧することができる。

いぬかい (2016, 2018) は、日本版の訳注の問題点を

- 1) 日本版のロシア語解釈の問題
- 2) ゴンザの訳語の日本版による解釈の問題
- 3) ゴンザのロシア語解釈がまちがっていることに日本版が気づかなかったこと

の3つに分類して紹介したが、それでも解決できなかった問題点について、今回「手がきのキリル文字からカタカナ」へのかきかえに原因があった可能性について検討した。

2. ゴンザの訳語としてかかれたキリル文字が不鮮明でよみにくい例

2. 1 『しんしまわす』

「ロシア語」(ラテン文字転写) 「村山七郎訳」 『ゴンザ訳』

「Обселяю」(obselyayu) 「植民する、定住させる」 『しんしまわす』

cf. シンシ(進止) 土地や人間を心そのままに取り扱うこと。日本国語大辞典

岩波ロシア語辞典 「обселить (住宅・土地に) 入居(移住、入植) させる; (住宅・土地に) 入居(移住、入植) する。」、

「土地」というキーワードはみだし語と村山七郎注に共通するが、村山七郎が引用した日本国語大辞典にでている出典は「長福寺文書」(14世紀)、「平家物語」(14世紀?)、「太平記」(14世紀)、「東寺百合文書」(8-18世紀)と、ふるい文献ばかりで、18世紀の薩摩の町人の子どもだったゴンザがこんなことばをつかっていたとはとうていおもえない。

また、ロシア語の「Об-」(ob-)という接辞がついた動詞に、ゴンザは『-まわす』『-まわる』という訳語をかくことがおおく、全部で34例ある。『しんしまわす』以外の33例はすべて動詞の連用形に『-まわす』『-まわる』が接続した形で、『しんしまわす』が名詞に『-まわす』が接続した唯一の例外ということになる。

もし、ゴンザの語彙に(しんする)という動詞があったなら、連用形に『-まわす』が接続すると、『しんしまわす』になるが、(しんする)という動詞はみつからない。

ゴンザの辞書の中から、おなじ動詞語幹に別の接辞がついたものをさがしてみると、

「селяся」(selyusya)	「居を定める」	『いえなをす』
「вселяю」(vselyayu)	「定住させる」	『おく』
「населяю」(naselyayu)	「植民する」	『なをしょうつし』
「поселяюся」(poselyayusya)	「移住する」	『うつる』
「преселяюся」(preselyayusya)	「移住する」	『なをる』
「уселяю」(uselyayu)	「住居をつくる」	『ふしんする』

『ふしんする』というのがある。このことに留意して、鹿児島県立図書館にある原稿コピーをみたら、ゴンザの訳語の語頭に、まっくらなものがあって、村山七郎はこれを何かの文字をけしたものと判断したようだが、よくみると、「В」(v)の文字の中のかこまれた空間にインクがはいりこんだようにみえる。

ゴンザは『Вшиншимаваc』(vshinshimavas)『ふしんしまわす』(普請しまわす)とかいていて、意味は「周囲に家をつくってすまわせる」ということだろう。

2. 2 『おすくる』

「подлагаю」(podlagayu) 「下に押しこむ」 『おすくる』 押しくる

みだし語は「под」(pod)「下に」という接辞と動詞語幹「лагаю」(lagayu)「おく」からなりたっている。『おく』という意味はない。

鹿児島県立図書館にある原稿コピーをみたら、ゴンザの訳語は『оскуръ』(oskur')『おすくる』のように『o』(o)「お」と『c』(s)「す」がはなれている上、『o』(o)「お」にはけしたようなよごれがある。

ゴンザの訳語は『скуръ』(skur')『すくる』であるとおもわれる。『скуръ』(skur')『すくる』はゴンザの辞書のほかの項目にもでてくる。

「подпирायу」(podpirayu)「つかえものを置く」『すけもんすくる』

cf. スケル 物の下敷にする。敷く。山口県玖珂郡。裏打する。当てがう。高知。TZH.

村山七郎がけされた『o』(o)「お」をよみとってしまったため、『скуръ』(skur')『すくる』「ささえるために下におく」が『おすくる』「押しくる」になってしまった。

3. んざの訳語としてかかれたキリル文字をほかの文字によみとってしまう例

3. 1 『в』(v)と『т』(t)

「именитый」(imenityi) 「有名な」 『かたつたと』 語つたト

「именитый」(imenityi)は「имя」(imya) (名)の派生語だから、村山七郎注の(語つた)とは関係なく(ふつうとはちがっている)ので(名前がしれわたつた)というような意味である。

鹿児島県立図書館にあって原稿コピーをみたら、ゴンザは『каваттаъ』(kavattat')『かわつたと』とかいていた。キリル文字の「т」(t)の筆記体は「m」のようにかくことがおおい。一方、キリル文字の「в」(v)を左にかたむけてかくと「m」にととてもちかくなるので、村山七郎は「в」(v)を「т」(t)に転写して、その結果「かわつた」が「かたつた」になってしまった。

3. 2 『и』(i)と『н』(n)

3. 2. 1 『さきんかくる』と『さきいかくる』

「преднаветую」(prednavetuyu)「先にそそのかす」『さきんかくる』先にかくる

ゴンザの訳語の『かくる』は現代日本語とおなじように(ひっかける)(ふりかける)(はかりにかける)のような動作をあらわすのにつかわれて、(そそのかす)というような意味でつかわれることはない。

しかし、みだし語は「そそのかす」というような意味である。

岩波ロシア語辞典 「навет 中傷、誹謗。」

鹿児島県立図書館にあって原稿コピーをみたら、ゴンザは『сакникакуръ』(saki ikakur')『さきいかくる』とかいていた。

キリル文字の『и』(i)と『н』(n)はよくにているので、村山七郎は「и」(i)を「н」(n)に転写して、その結果「さきいかくる」が「さきんかくる」になってしまった。

『いかくる』はゴンザの辞書にでてくる。

「наустяю」(naustyayu) 「使喚する」 『いかくる』

日本国語大辞典 「いいかける (言掛) ③無実のことを、その人の責任のように偽り言う。言いがかりをつける。難癖をつける。」

3. 2. 2 『にゅぼいことする』と『にゅぼんことする』

「ж е н с т в у ю」(zhenstvuyu) 「妻となる」 『にゅぼいことする』女房行こうとする

「女房行こうとする」の意味がわからないが、みだし語の男性版がゴンザの辞書にある。

「м у ж е с т в у ю」(muzhestvuyu) 「勇敢に戦う」 『おとこんことする』

鹿児島県立図書館において原稿コピーをみたら、ゴンザは『н ю б о н к о т с у р ь』(nyubonkotsur') 『にゅぼんことする』とかいていた。ゴンザの『にゅぼんことする』は「女のことをする」(女らしくする)である。

キリル文字の『и』(i)と『н』(n)はよくにているので、村山七郎は「и」(i)を「н」(n)に転写して、その結果「にゅぼんことする」(女らしくする)が「にゅぼいことする」(女房行こうとする)になってしまった。

3. 2. 3 『ふあいとる』と『ふあんとる』

「р а с п е ч а т ы в а ю」(raspechatyvayu) 「封印を取り去る」 『ふあいとる』貼り(を)取る

鹿児島県立図書館において原稿コピーをみたら、ゴンザは『ф а н т о р ь』(fantor') 『ふあんとる』とかいていた。

キリル文字の『и』(i)と『н』(n)はよくにているので、村山七郎は「н」(n)を「и」(i)に転写して、その結果「ふあんとる」(判とる)(封印をとる)が「ふあいとる」(貼りとる)(貼り(を)とる)になってしまった。

3. 3 『к』(k)と『н』(n)

3. 3. 1 『すぐな』と『すぐか』

「п р а в и л н о」(pravilno) 「正しく」 『すぐなこと』

「п р а в и л н ы й」(pravilnyi) 「正しい」 『すぐなとんと』

「п р а в ы й」(pravyi) 「真実な」 『すぐなと』

日本国語大辞典

「すぐ (直) 1 (形動) まっすぐで曲がっていないさま。」

「すぐい (直) (形口) まっすぐである。曲がっていない。正しい。」

日本国語大辞典にでているのとおなじように、ごんざのことばの『すぐ』には(すぐか)というイ形容詞の形と(すぐな)というナ形容詞の形が併存している、とおもっていたが、鹿児島県立図書館において原稿コピーをみたら、ゴンザは3項目とも『с у г к а』(sugka) 『すぐか』とかいていた。

キリル文字の『к』(k)と『н』(n)はよくにているので、村山七郎は『к』(k)を「н」(n)に転写して、その結果「すぐか」が「すぐな」になってしまった。

3. 3. 2 『しとな』と『しとか』

「п о л б е л ы и」(polbelyi) 「半ば白い」 『ふあんぶんしとなと』 半分白なト

鹿児島県立図書館にいて原稿コピーをみたら、ゴンザは『ф а н б у н ш т о к а т ь』(fanbunshtokat') 『ふあんぶんしとかと』とかいていた。

キリル文字の『к』(k)と『н』(n)はよくにているので、村山七郎は『к』(k)を「н」(n)に転写して、その結果「しとかと」が「しとなと」になってしまった。

ごんざの辞書に「しろな」というナ形容詞形はでてこない。

3. 3. 3 『かけなる』と『なけなる』

「О г р а ж д а ю с я」(ograzhdayusya) 「防ぐ、垣でかこまれる」 『かけなる』

鹿児島県立図書館にいて原稿コピーをみたら、ゴンザは『н а к е н а р ь』(nakenar') 『なけなる』(中になる)とかいていた。

キリル文字の『к』(k)と『н』(n)はよくにているので、村山七郎は『к』(k)を「н」(n)に転写して、その結果「なけなる」(中になる)が「かけなる」(垣になる)になってしまった。

みだし語の意味は(垣になる)ではなく(中にこもる)という意味である。

岩波ロシア語辞典 「о г р а д и т ь с я 1 閉じこもる、孤立する。」

3. 3. 4 『みごとなやま』と『みごとかやま』

A 「д р у б р о в а」(drubrova) 「鬱蒼たる森」 『みごとなやま』 (見事な林)

B 「д р у р о в ы й」(drurovyy) 「密林の」 『みごとかやまんと』 (見事い林の)

連続してでてくる2項目のうち、Aがナ形容詞の「みごとな」、Bがイ形容詞の「みごとか」という訳語になっている。

鹿児島県立図書館にいて原稿コピーをみたら、Aのゴンザの訳語はたしかに『миг о т н а я м а』(migotnayama) 『みごとなやま』とよめる。しかし、ゴンザの訳語の『みごと』はゴンザの辞書に13例でてくるが、ナ形容詞はAの1例だけで、ほかはすべてイ形容詞である。Aについても、『к』(k)に横棒のようなよごれがついて『н』(n)によんでしまった可能性がたかきとおもわれる。

3. 3. 5 『ふること』と『ふるのと』

「п р е с т а р е л ы и」(prestarelyi) 「非常に古いところの」 『くつふること』

形容詞の語幹『ふる』と抽象名詞『こと』が直接接続していることに違和感を感じる。また、みだし語が形容詞なのに、ゴンザの訳語が名詞になっていることから、ゴンザの訳語は(くつふるかと)であるべきだとおもってしらべると、ゴンザの辞書に(ふるかと)ということばはでてこない。

辞書には、連用修飾では『ф у р у』(furu) 『ふる』 「ふるく」、連体修飾では『ф у р н о』(furno) 『ふるの』という形ででてくる。『к ц у ф у р н о т ь』(ktsufurnot') 「くつふるのと」の『н』(n)の横棒がきえてしまって、『к ц у ф у р к о т ь』(ktsufurkot') 「くつふること」によんでしまった可能性もあるとおもわれる。

3. 4 『к』(k)と『и』(i)

「сличаяю」(slichayu) 「結びつける」 『ふとつくれなす』 一つ位になす
「сличныи」(slichnyi) 「調和したる」 『ふとついろんと』 一つ色の

おなじ語根から派生した動詞と形容詞だが、動詞の『くれ』(位)という訳語はみだし語とあわないし、ゴンザが『くれ』(位)とつづる場合は『к у р е』(kure)とつづるのに、ここでは『к р е』(kre)と母音がない。鹿児島県立図書館にいて原稿コピーをみたら、ゴンザは『ф т о ц ь и р е н а с ь』(ftots' irenas')『ふとつれなす』とかいていた。

キリル文字の『к』(k)と『и』(i)はよくにているので、村山七郎は「и」(i)を「к」(k)に転写して、その結果「ふとつれなす」(ひとつ色にする)が「ふとつくれなす」(ひとつ位にする)になってしまった。

3. 5 『к』(k)と『с с』(ss)

「Отвержение」(otverzhenie) 「拒否されること」 『うくること』

「うける」と『うくる』の語形はちかいが、「拒否される」と「病気、恥、疑いなどを被る」の意味はことなる。みだし語についている接辞「ОТ」(ot)は「分離」の意味をあらわすので、「うける」とは正反対である。

この接辞がついたほかの動詞をゴンザの辞書からさがしてみた。

「Отвозю」(otvozyu) 「引きずり去る」 『ふいちうつする』 ф и ч ь у с с у р ь

「Откидаю」(otkidayu) 「投げすてる」 『うつする』 у с с у р ь

「Отражаю」(otrazhayu) 「捨てる」 『うつする』 у с с у р ь

ゴンザの訳語の『うつする』は「すてる」という意味である。

鹿児島県立図書館にいて原稿コピーをみたら、村山七郎が『у к у р к о т ь』(ukurkot')『うくること』とよみとったゴンザの訳語は『у с с у р к о т ь』(ussurkot')『うつすること』とかいてあった。

3. 6 『а』(a)と『о』(o)

「Отстаю」(otstayu) 「宿営する、離れて立つ」 『なこる あてたつ』中に居る 後に立つ
岩波ロシア語辞典

「отстать 1 遅れる、取り残される；(途中下車して) 乗り遅れる。」

接辞の「от」(ot)は分離をあらわすので、動詞は「中に居る」ではなく(はなれて存在する)という意味で、岩波ロシア語辞典の語釈も(みんながいつってしまったのに自分だけが) (おくれて、とりのこされる)ということであろう。

鹿児島県立図書館にいて原稿コピーをみたら、ゴンザは『н о к о р ь а т е т а ц 』(nokor' atetats)『のこる あてたつ』とかいていた。

キリル文字の『а』(a)と『о』(o)はよくにているので、村山七郎は『о』(o)を『а』(a)に転写して、その結果「のこる」が「なこる」(中にいる)になってしまった。

4. 日本語の「ゆ」と「よ」のキリル文字表記

現代日本語の「ゆ」と「よ」をキリル文字でつづる場合、「ゆ」はキリル文字の「ю」でつづられるが、「よ」

は「ё」「и о」「ь о」などがある。ゴンザの辞書では「ゆ」はキリル文字の「ю」、「よ」は「ю」に上線をつけた「ю[—]」とつづられる。

4. 1 「みゆ」と「みよ」

「в з г л я д ъ」(vzgljad') 「視線」 『みゆ』 見ゆ

鹿児島県立図書館にいて原稿コピーをみたら、ゴンザの訳語は『м и ю』の『ю』の上に横棒(—)がついている。

ゴンザは日本語の(ゆ)を『ю』(yu)、(よ)を横棒(—)がついた『ю』(yo)でかくので、ゴンザの訳語を(みゆ)とかいた村山七郎の日本版はまちがいで、『みよ』がただしい。

日本国語大辞典 「みよう(見様) 見る様子。見る方法。みかた。」

4. 2 「ゆめし」と「よめし」

A 「в е ч е р я」(vecherya) 「夕食」 『ゆめしどき』

B 「в е ч е р я ю」(vecheryayu) 「夕食を食う」 『ゆめしく』

C 「у ж и н а」(uzhina) 「晩餐、夜食」 『ゆめし』

D 「у ж и н а ю」(uzhinayu) 「夜食をたべる、夜食する」 『ゆめしく』

ABが夕食で、CDはそれよりおそい夜食であるらしいことは村山七郎訳からもわかる。

鹿児島県立図書館の原稿コピーをみると、ゴンザの訳語のつづりは

Aが『ю м е ш д о к ъ』(yumeshdoki) 『ゆめしどき』

Bが『ю м е ш к у』(yumeshku) 『ゆめしく』

Cが『ю м е ш ъ』(yumesh') 『ゆめし』

Dが『ю м е ш к у』(yumeshku) 『ゆめしく』

であるが、CとDは語頭の『ю』(yu)の上に横棒(—)がかいてある。

ゴンザのキリル文字日本語表記のルールでは『ю』(yu)の上に横棒(—)がかいてあるのは(ゆ)ではなく(よ)をあらわしている。

横棒(—)がかきまちがいではないとすると、ゴンザの訳語は(ゆめし)(ゆめしく)ではなく『よめし』『よめしく』だということになる。

日本国語大辞典 「よめし(夜飯)(方言) 夕食、夕飯。岩手県和賀郡、山形県西置賜郡、東京都江戸川区、伊豆三宅島、富山県砺波、福井県、長野県下水内郡、但馬、淡路島、愛媛県、高知県幡多郡大方。」

ごんざの訳語は『よめし』（夜飯）『よめしく』（夜飯くう）である。

5. おわりに

1985年に村山七郎が訳注をくわえて出版した「新スラヴ・日本語辞典」日本版は、薩摩方言の研究者にとってつかいやすい資料になった。日本版をゴンザの辞書のオリジナルとして、あつかう研究者もおおい。

しかし、日本版はかならずしも鮮明ではない原稿のコピーを目でみて転写した写本を活字化したものなので、転写のまちがいのリスクはある。わかりにくい解釈と感じたら、鹿児島県立図書館で原文コピーを確認した方がいい。

「べんけいがな ぎなたをもつてや」という記述を目にしたら、「ぎなた」というききなれないことばについて十分にしらべるだけでなく、記述の方式の妥当性についてもかんがえてみた方がいいとおもう。

参考文献

- いぬかみいいて(2016)「ゴンザの『新スラヴ日本語辞典日本版』(1985)の訳注の問題点」
『日本方言研究会第102回研究発表会発表原稿集』, 13-20
- いぬかみいいて(2017)「ゴンザの『新スラヴ日本語辞典日本版』の重複みだし語について」
『日本語教育連絡会議論文集vo129』
- いぬかみいいて(2018)「ゴンザの『新スラヴ日本語辞典日本版』(1985)の訳注の問題点 その2」
『日本語教育連絡会議論文集vo130』
- いぬかみいいて(2020)「ゴンザの『新スラヴ日本語辞典』にあらわれる『в нѣ』(vne)という訳語について」
『日本語教育連絡会議論文集vo132』
- いぬかみいいて(2024)「ロシア語学習者としてのゴンザと日本語教育者としてのゴンザ ―子音連続の学習と指導―」
『日本語教育連絡会議論文集vo136』
- 上村忠昌(2006)『漂流青年ゴンザの著作と言語に関する総合的研究』南日本新聞開発センター
- 上村忠昌(2016)『鹿児島方言の今昔』南日本新聞開発センター
- 村山七郎(1965)『漂流民の言語』吉川弘文館
- 村山七郎(1985)『新スラヴ・日本語辞典』ナウカ